

# 白山人類学

19号

2016年3月

## 目次

《特集》ヨーロッパにおける移民二世代の学校適応  
——教育人類学的アプローチ——

序 山本 須美子……………1

### < 論文 >

オランダの中国系二世代にみる学校適応の要因  
——文氏宗親会による学業達成賞受賞者へのインタビューから  
山本 須美子……………9

イースト・ロンドンの女性ムスリムの教育意識  
——家族・主体性・信仰  
安達 智史……………33

ドイツにおけるイスラーム運動と教育  
——ヒズメット運動による教育への取り組み  
石川 真作……………57

フランスのポルトガル系移民の学校適応  
——ポルトガル系政治家の事例  
鈴木 規子……………81

フランス・アルジェリア系移民二世代の学校経験と変化する学校  
——パリ郊外の優先教育地区を中心に  
植村 清加……………105

### < 研究ノート >

アソシエーションによるセイフティネット  
——パリのグット・ドール地区の例から  
渋谷 努……………131

### 論文

農村社会と「国家」言説——広東省潮汕地域における  
農村住民の日常生活から  
横田 浩一……………147

ジャワ汽水養殖池地域の社会経済——環境悪化下での地主、  
小作人、地域社会の駆け引きを中心に  
間瀬 朋子……………169

火葬化過程における墓の「継承」——佐渡市T集落墓地における  
墓制の変遷を事例として  
鈴木 洋平……………197

「ねずみの道」の正当性——ティモール島国境地帯の密輸に見る  
国家と周辺社会の関係  
森田 良成……………225

# HAKUSAN JINRUIGAKU

## Hakusan Review of Anthropology

Vol. 19

March 2016

### CONTENTS

#### Special Theme: School Adaptations of Second Generation Migrants in Europe:

##### From the Viewpoint of Educational Anthropology

YAMAMOTO Sumiko	Introduction .....	1
< Articles >		
YAMAMOTO Sumiko	The Factors of School Success among Second Generation Chinese in the Netherlands: Based on the Interviews with Recipients of Academic Awards from Man Clansmen Association .....	9
ADACHI Satoshi	Educational Attitudes of Muslim Women in East London: Family, Agency and Faith .....	33
ISHIKAWA Shinsaku	The Islamic Movement and its Engagement for Education in Germany: Concepts of the Hizmet Movement .....	57
SUZUKI Noriko	Adaptation on School of Portuguese Immigrants in France: A Case of Portuguese Politicians .....	81
UEMURA Sayaka	Experience of the Second Generation Algerian Immigrants at Schools and the Schools Facing with Changes .....	105
< Research Notes >		
SHIBUYA Tsutomu	Voluntary Association Activities Functioning as a Social Safety Net: A View from Goutte-d'Or, Paris .....	131
< Articles >		
YOKOTA Koichi	Rural Society and 'State' Discourse: From Everyday Life of Rural People in Chaoshan District, Guangdong .....	147
MASE Tomoko	Social Economy in a Javanese Brackish Water Aquaculture Area: Focusing on Bargaining among Landlords, Tenant Farmers and the Local Community under Environmental Deterioration .....	169
SUZUKI Yohei	Burial Bodies, Burial Bones: Acceptance of Cremation in T District, Sado City .....	197
MORITA Yoshinari	Validity of "Mouse Trail": Relations between Nations and Peripheral Societies in Cross-Border Smuggling on Timor Island .....	225

## 白山人類学研究会

白山人類学研究会は、東洋大学社会学部社会文化システム学科の教員を世話人として組織されている。定例研究会は、原則として毎月第3または第4月曜日、東洋大学8号館で開催される。また、2007年度からは年次フォーラムを開催している。8~9月は夏休み、2~3月は春休みとし、研究会は開催しない。研究会の案内は電子メールを通じておこなっている。

連絡先：研究会事務局 [hakusanjinrui@gmail.com](mailto:hakusanjinrui@gmail.com)

## 白山人類学研究会 2015 年度の活動

### □ 2015年5月18日第1回研究会

演題：ソロモン諸島の村落内紛争にみられた応報的正義と修復的正義——「互恵」と「共感」  
はどのような形で具現したか

発表者：竹川大介（北九州市立大学）

要旨：本発表では、人間の道徳性の起源に関する進化論的な議論をもとに、フィールドでえられた紛争の事例を分析した。これまで文化人類学は多数の文化の多様な価値観を明らかにしてきた。しかし一方で異なる宗教や個別の正義観に通底する道徳の普遍性に対する関心は、文化相対主義の中に埋もれてしまっている。たとえばこうした道徳の文化的多様性の問題は、言語の文化的多様性と対比させるとわかりやすいだろう。すべての人間文化が言語を持つことから、生成文法のような普遍特性の存在を仮説立てられるのと同様に、個別文化の正義のありかたがいかに奇異なものであっても、その枠組みには進化論的な起源を持つ共通の普遍性があるのではないかという視点は可能である。例えば霊長類学者フランス・ドゥ・ヴァールは、「互恵」と「共感」をモラルの生物学的なふたつの柱と呼んでいる。本発表では紛争解決における正義の実現の際に、この「互恵」と「共感」がどのように現れるかに注目した。互恵とは、公平さを求めるもので、相手との利害判断に関連する情動である。一方で共感とは、信頼や利他性に関連する情動である。ところで「正義」という言葉は、英語の **Justice** の訳語であり、日本語では別に「司法」と訳される場合がある。近年、司法の世界では、刑罰による応報的な司法に対し、被害者の救済および加害者の再犯防止や社会復帰の観点から修復的司法が関心をあつめている。修復的司法は個人の犯罪だけでなく、たとえば大量虐殺など取り返しがつかない国家的犯罪などに対する贖罪にも用いられている。この法学の世界での応報的正義と修復的正義のふたつの概念は、先に挙げた（因果応報的）互恵と（関係修復的）共感の対比と重なる。さて、ここからソロモン諸島でイルカ漁を行う F 村で観察されたふたつの事例を元に、紛争解決にみ

られた互恵性と共感性に焦点を当て、社会的な応報と修復がどのように進化したかを検討した。ふたつの事例において、村の関係者たちがとった方法は、近代西洋的な司法判断（正義）に慣れている私を十分に驚かせるものだった。つまり予想もつかない利他行為によって彼らは紛争の解決を図ったのである。それは正義の応酬を巧みに回避し、過ちを犯した相手を罰するのではなく逆に許しを請い、解決のおとしどころを模索するというやりかただった。しかし彼らの説明を受け、そのあと起きたことを考えると、決して奇異な解決方法ではなく、わたしたちにも十分に理解できる普遍性を持っていた。これらの事例から、村人たちが巧みに互恵性を操作し、相手との共感性を基盤とした道徳を利用していることが示された。

#### □ 2015年6月15日第2回研究会

演題：民俗学からフォークロア研究へ——「人びとのヴァナキュラーな創造性」をめぐる問題を  
中心に

発表者：島村恭則（関西学院大学）

要旨：発表者はこれまで、日本列島／南西諸島／朝鮮半島をフィールドに、宮古島の村落祭祀における民間巫者の問題、沖縄における新宗教の生成、韓国の現代伝説、喫茶店モーニング文化、アジールとしての別府と伊東、地方花柳界の盛衰と文化資源化、家船とかき船、在日朝鮮系住民の「生きる方法」、引揚者が生み出した戦後の社会空間と文化、などについて研究してきた。これらは、一見、そのときどきの興味に従った、脈絡がバラバラな研究の群れのように見えるかもしれないが、そうではない。これらの研究には、「人びとのヴァナキュラーな創造性」の追究という一貫した問題意識が存在している。ここでヴァナキュラーとは、「オーソリティとは異質の、もしくはオーソリティによるコントロールが困難な（場合によっては不可能な）創造性」をさす。日本でも、イリイチのシャドウ・ワーク論や、建築学における「ヴァナキュラー建築」を通して「ヴァナキュラー」は知られているが、現在、北米のフォークロア研究や文芸批評においては、さらに広い文脈で、社会・文化のあり方を批判的に捉え、再構想してゆく際の鍵概念としてヴァナキュラーがさかんに用いられるところとなっている。本発表では、発表者自身のこれまでの調査データを吟味しながら、「人びとのヴァナキュラーな創造性」について検討するとともに、近年、取り組んでいる民俗学の再文脈化＝フォークロア研究の構想について説き及んだ。

#### □ 2015年7月13日第3回研究会

演題：月経の経験を形づくる知とモノと——開発支援されるウガンダと、衛生大国日本の事例  
から考える

発表者：杉田映理（東洋大学） / 出野結香（王子製紙）

要旨：女性だけが経験する月経は、身体的な生理現象であると同時に、地域や時代によって様々な様相を示す文化的な側面を強く持つ。月経にまつわる慣習や禁忌、隠語はどの社会にも見られ、多くの社会において月経は「隠された」領域となっている。一方、月経への対処が近年、国際的な開発アジェンダとして急浮上し公の場で語られるようになってきた。「適切な」月経の対処のために UNICEF や国際 NGO は、生理用ナプキンの配布、再利用できる布ナプキンの普及、学校トイレの改善などの活動を開始している。支援の対象は、主に学校に通う女子生徒である。しかし、文化的な側面が強く影響する月経への対処は、それぞれの慣習や禁忌、当事者の声を踏まえることが必要なのではないだろうか。そうした問題意識から、本発表ではウガンダの農村部において、女性がどのように月経を迎え、対処し、どのようなことを怖れているのかを、具体的に見た。そして、これを一般的に開発支援で提案されることと照らし合わせながら、議論した（杉田報告）。また、開発支援の対象となる途上国だけではなく、衛生大国と言われる日本においても女性は月経の問題から解放されているわけではない。月経をどのように捉え経験するかは、情報や月経対処の製品、年代の影響を受けるところが大きい。日本の女性への意識調査の結果も併せて報告した（出野報告）。

#### □ 2015 年 10 月 19 日第 4 回研究会

演題：故郷と居住地をつなぐ——在日台湾人社会における媽祖廟建立活動

発表者：鈴木洋平（東京都市大学）

要旨：2013 年に新宿区大久保に開かれた東京媽祖廟では、台湾や中国の人々を中心としながら、広く日本に暮らす人々を対象とした活動が進められている。日本に媽祖廟を作ろうとした試みは、東京媽祖廟が作られる以前より行われてきた。その活動の中心となってきたのが日本媽祖会であった。本発表では、日本媽祖会による媽祖信仰普及活動と、日本での媽祖廟建立を目指した活動の推移について、初代会長である I 氏の動きを中心に紹介した。I 氏の個人的な経験を活動開始の契機としながらも、廟建立を目指す活動は北港・台湾出身者／台湾在住者／華人系移民／日本人引揚者／廟候補地に関わる各地域住民といった、様々な人々を巻き込みながら展開していった。I 氏は、日本に暮らす台僑としての自分と、出身地である雲林県北港鎮との結びつきを非常に重視している。媽祖廟建立以外にも、北港に暮らす親族や地域住民とのつながる活動を積極的に進めてきた。自分の故郷である北港・台湾と、自分が暮らす場所としての日本。両者の結びつきを深めることへの意志が、I 氏の媽祖廟建立活動推進の背景となっている。媽祖廟建立活動は関係者の地域・世代を広げながら、故郷を離れて暮らす人々が、今の居住地である日本にあって故郷と繋がることを可能にする結節点として機能してきた。今後も担い手の変化の中で、彼らの活動は形態を変えながら進んでいくだろう。以上の検討を通し、複数世代にわたって活動する日本台僑研究の可能性を検討した。

□ 2015年12月15日第5回研究会

演題：ナショナル・ヒストリーを問い直す——メキシコ南部地域からのまなざし

発表者：山越英嗣（早稲田大学人間総合研究センター）

要旨：1980年代以降、メキシコ政府が推進してきた新自由主義的政策に対する不満は、とくに先住民人口の多い南部地域で高まりをみせている。とりわけ、村落出身の若者たちのあいだには、外資系企業と政府が結託して行う開発事業が彼らの生活を脅かし、貧困や格差の拡大を生みだしているという言説が広まっている。本発表は、2006年にオアハカ市で生じた州政府に対する民衆の抗議運動の際、ストリートアートを用いて現政権の不正を糾弾し、民衆を心的に統合しようと試みた若者アーティスト集団、ASARO（Asamblea de Artistas Revolucionarios de Oaxaca、オアハカ革命芸術家集会）の活動を対象とした。彼らは、民衆の統合シンボルとしてメキシコ革命の英雄たちを用いたことで知られる。先行研究において、これはナショナリズムの高まりを示すものとして理解されている。しかしながら、発表者は、運動参加者たちがここに、ナショナル・ヒストリーで意味づけられてきたものとは異なる文脈の意味を与えたことに注目した。

□ 2016年1月18日第6回研究会

演題：ベトナム村落生活の持続と変化——葬送互助慣行の歴史的考察を通じて

発表者：川上 崇（東洋大学アジア文化研究所）

要旨：本発表ではベトナム北部の一村落における葬送互助慣行を、1945年の革命直前から社会主義化を経て、市場経済化の定着しつつある現在までの約60年にわたり跡付け、ローカルな社会生活が如何に変化しつつ持続し、村の現在を成立させているかが報告された。ベトナム村落研究では既に、社会主義化の過程で断行された国家主導の信仰祭祀改革についての実証的解明がなされており、改革の影響は現在の儀礼実践においても色濃く見て取れることが知られている。本発表では先行研究を継承しつつも、調査村の人々の多くが社会主義化の当時を、葬送互助の断絶の時代とは見ていない点に注目した。そして、彼らの歴史認識を念頭に事例を検討し、(1) 革命前からの慣れ親しんだ人間関係の在り方が、現在でも葬送互助を初め、社会生活の場での人々の行動を強く規定していること、(2) 社会主義化は、調査村においては、この規範意識を弱めることなく逆に強化したこと、(3) そして、その意識の強化が、市場経済化に伴う経済変化を背景に、現在、葬送互助実践を揺るがす大きな問題を引き起していることを指摘した。

□ 2015 年 11 月 7 日第 8 回研究フォーラム

「ヨーロッパにおける移民二世代の学校適応——教育人類学的アプローチ」

企画者：山本須美子（東洋大学社会学部）

※科学研究費事業「EU における移民二世代の学校適応に関する教育人類学的研究」代表：山本須美子 [東洋大学]）との共催。

趣旨：今年 1 月フランス・パリでの預言者ムハンマドの風刺画を掲載した出版社が襲撃されたテロ事件に象徴されるように、第二次世界大戦後ヨーロッパに流入した移民二世代の社会統合の遅れは社会問題化し、その根底には、主流社会の学校からの中退や低学力といった学校不適応に関わる問題があることが指摘されている。他方で、特に中国系や東南アジア系、インド系二世代は多数派の子どもよりも高い学業成績を上げ、またトルコ系やモロッコ系等問題とされているイスラム系二世代の中にも学校に適応し、社会的上昇を遂げ都市のミドルクラスに参入する者も現れている。本フォーラムでは、ヨーロッパ諸国における移民二世代の学校適応をめぐる実態とその背後にある要因を、教育人類学的アプローチから明らかにした。教育人類学とは教育現象を文化人類学的視角から検討するもので、ここでは、ドイツ、フランス、イギリス、オランダの 4 ヶ国における移民二世代の学校適応をめぐる実態とその要因を文化人類学的調査に基づいて、当事者のアイデンティティ形成過程、及び親やコミュニティを含む多角的視点から検討した。それによって、従来の大規模調査では抜け落ちていた点を補うだけでなく、移民二世代の学校適応をめぐる新たな局面を明らかにした。

プログラム：

13:00-13:15 趣旨説明（山本須美子）

13:15-13:45 発表① 石川真作（東北学院大学）

「ヒズメット運動の思想と教育への取り組み——ドイツでの展開を参照として」

13:45-14:15 発表② 植村清加（東京国際大学）

「フランスのマグレブ系二世代の学校経験と変化する学校」

14:15-14:45 発表③ 渋谷 努（中京大学）

「パリの移民地区アソシエーションによるセイフティネット」

（休憩）

15:00-15:30 発表④ 安達智史（近畿大学）

「イスラームと教育——イースト・ロンドンの女性たち」

15:30-16:00 発表⑤ 鈴木規子（東洋大学）

「フランスのポルトガル系政治家にみる学校適応と社会的上昇」

16:00-16:30 発表⑥ 山本須美子（東洋大学）

「オランダ文氏宗親会の学業達成賞受賞者にみる学校適応の要因」

16:30-16:40 コメント 丸山英樹（上智大学）

16:40-16:50 コメント 佐久間孝正（東京女子大学名誉教授）

16:50-17:30 ディスカッション



## 『白山人類学』投稿規定

### 1. 本誌の名称および目的

本誌は、日本語名を『白山人類学』、英語名を *Hakusan Review of Anthropology* と称し、白山人類学研究会の会誌として、会員による研究成果の発表およびこれに関連する情報・資料を提供するものである。本誌は年1回3月に刊行される。

### 2. 投稿資格

投稿は原則として本会会員に限る。ただし、編集委員は非会員に対しても寄稿を依頼することがある。

### 3. 掲載原稿

原稿は、広義の人類学的な視点に立った研究成果を中心とする。その種類は、原則として以下のように区分する。

- a. 論文（研究成果の発表）
- b. 研究ノート（試論的な報告）
- c. 翻訳（日本語以外の言語による論文の日本語訳）
- d. 資料（フィールドワーク等に基づく一次資料、原典史料の提供）
- e. 書評（新刊書の書評）
- f. 資料紹介・研究活動紹介（公開資料や研究活動、学術集会などの紹介）
- g. フィールド通信（フィールドワークの記録や短報）

a-c は 400 字詰め横書き原稿用紙で概ね 60 枚以内、d は 30 枚以内、e-g は 15 枚以内とする。いずれも未発表のものに限る。原稿には論文タイトル、投稿者の氏名、所属機関、所属機関、連絡先（電子メールアドレス）、英語タイトル、ローマ字氏名、所属の英語名を付記すること。a および b には、200-500 語程度の英文要旨、日本語および英語のキーワードをつける。

### 4. 原稿の作成・投稿の手続き

- (1) 原稿の作成にあたっては、本誌の執筆要領に従うこと。
- (2) 使用言語は日本語または英語に限る。日本語については、できるだけ常用漢字・新かなづかいを使用する（英語論文の執筆要領等については、編集委員に相談すること）。
- (3) 原稿は原則として MS ワードで作成し、電子メールに添付して編集委員に送付する。あるいは USB メモリ等の電子媒体に保存の上、編集委員に郵送する。電子メールの本文または郵送の場合は別紙に、使用ソフトのバージョン等を明記すること。
- (4) 日本語タイトル、執筆者の氏名、連絡先、使用ソフトのバージョン等を本誌巻末掲載の「投稿票」の様式に従って記入し、原稿とは別の「投稿票」ファイルとして電子メールに添付して編集委員に送付する。原稿郵送の場合は、プリントアウトしたものを原稿に同封すること。投稿票は、白山人類学研究会ウェブサイト（下記 8「原稿の送付先・問合せ先」参照）からダウンロードすることもできる。
- (5) 電子メールによる送付、郵送、いずれによる投稿の場合も、編集委員は電子メールで受領確認を投稿者に送付する。投稿後の一定期間、編集委員から連絡がない場合は、添付なしの電子メールか電話で編集委員に問い合わせること。

- (6) ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字、または制御記号や文字飾りを使用する場合は、投稿時に編集委員に相談すること。
- (7) 図、表、写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、「図」、「表」、「写真」等の名のファイルにまとめること。送付方法は原稿の場合と同じ。原稿採用後、編集委員が図、表、写真のレイアウトや提出方法を別途指示することもある。
- (8) 郵送された原稿（図、表、写真を含む）および電子媒体は、本誌への採否に関わらず投稿者に返却しない。刊行後しばらく保管した後、編集委員で処分する。
- (9) 各号の投稿締切日は毎年11月30日とする。

## 5. 原稿の採否・最終原稿の提出手続き

- (1) 論文・研究ノートの採否ならびにその区分については、投稿、依頼を問わず、本誌の査読規定に従うものとし、原則として2名の査読者（レフェリー）による査読の上、編集委員が決定する。原稿採用の条件として原稿の修正を求める場合がある。
- (2) 著者による校正は、原則として初校のみとする。誤字・脱字と誤植以外の変更は、必要最低限にとどめる。加筆および訂正が必要以上に多い場合は、採用を取り消すこともある。

## 6. 原稿料の支払い等

- (1) 原稿料の支払いはしない。
- (2) 抜き刷りは、著者負担で作成することとする。

## 7. 著作権

採用原稿については、著作権のうち、複製権、翻訳・翻案権、公衆送信・伝達権（いずれも電子形態による場合を含む）を白山人類学研究会代表に譲渡することとする。

## 8. 原稿の送付先・問合せ先（2016年度）

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

『白山人類学』編集委員

東洋大学社会学部 植野弘子（編集委員長） 長津一史

E-mail: uenohi@toyo.jp/ nagatsu@toyo.jp

\*電子メールに添付して原稿を送付する場合は、かならず双方あてに送信すること。

白山人類学研究会ウェブサイト：<http://hakusan-jinruigaku.toyo.ac.jp>

## 9. 本規定の改廃

本規定の改廃は、白山人類学研究会運営委員の承認によっておこなう。

## 10. 附則

本規定は、2016年4月1日から施行する。

## 『白山人類学』執筆要領

### はじめに

本誌の表記と体裁を統一し、多くの読者に読みやすいものとするため、この執筆要領にしたがってご執筆ください。執筆要領の内容は主として論文および研究ノートの作成を念頭においていますが、その他の原稿を作成する場合も、原則としてこの執筆要領に準拠してください。

### 1. 原稿の形態

- 1-1 原稿は原則としてMSワードで作成し、電子メールに添付して編集委員に送付する。
- 1-2 ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字、または制御記号や文字飾りを使用する場合は、投稿時に編集委員に相談すること。
- 1-3 図、表、写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、「図」、「表」、「写真」等の名のファイルにまとめること。
- 1-4 投稿原稿のMSワードの設定は、A4版、横書き、余白：上下左右30mm、一行の文字数：38字、行数：40行、行間：1行、フォントサイズ：11ポイント、用紙の端からの距離：ヘッダー・フッターともに15mmとすること。
- 1-5 日本語は、章の表題、節の表題については全角MSゴシック、本文および脚注文については全角MS明朝を使用する。
- 1-6 ローマ字アルファベットおよび数字は、原則としてすべて半角centuryを使用する。
- 1-7 英文要旨については、原則として英文校閲の専門家による校閲を受けたものを提出すること。なお、編集委員が別途、英文校閲の専門家に依頼して、言語的修正をおこなうこともある。

### 2. 論文の構成

- 2-1 原稿は以下のような構成とする。ただし、翻訳、資料、書評、資料紹介・研究活動紹介、フィールド通信には、キーワードおよび英文要旨を付さない。翻訳の原文が英語の場合は、英語タイトルを重ねて記す必要はないが、原文が英語以外の場合は原文タイトルの英語訳を記す。

- (1) 日本語タイトル
- (2) 日本語氏名
- (3) 日本語所属（\*\*大学\*\*研究科等）
- (4) 電子メールアドレス
- (5) 英語タイトル  
\*英語タイトルについては編集委員の責任で変更を加えることがある。
- (6) ローマ字氏名
- (7) 所属の英語名

\*なお、最終原稿において所属は、氏名の末尾に上付きアスタリスク（\*、日本語氏名末は全角MS明朝、英語氏名末には半角century）を付して、脚注ブロックにアスタリスク（半角century）を入れ、半角スペースをあけて、所属のみを日本語で、続けて全

角セミコロン ( ; ) の後に、所属・住所/電子メールアドレスを英語で記す。

例:

\* 東洋大学社会学部; Faculty of Sociology, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 112-8606/ hakusantarou@toyo.jp

- (8) 英文要旨 (200-400 語程度)
- (9) 日本語キーワード (5 語前後)
- (10) 英語キーワード (5 語前後)
- (11) 本文
- (12) 注

\*脚注方式とし、各ページの下部に示す。

- (13) 謝辞 (必要な場合)
- (14) 参考文献 (見出しは「参考文献」とする。参考文献, 引用文献等としない)
- (15) 図, 表, 写真は, 原則として原稿本体とは別に準備し, そのファイルを保存した電子媒体とあわせて, プリントアウトしたものを編集委員会に郵送する。本文中に挿入箇所を示しておくこと。図, 表, 写真についても, 電子ファイルの形式は, 原則として MS ワードによるものとする。他のファイル形式で提出する場合は, 投稿時に編集委員に相談すること。原稿採用後の図, 表, 写真の提出方法については, 編集委員が別途指示する。

2-2 章・節等の表記は、以下のとおりとする。

- (1) 章番号は、半角ローマ数字 (I, II…、フォントは century) で示す。
- (2) 節番号は、半角アラビア数字 (1, 2…、フォントは century) で示す。
- (3) 節以下を細分する場合には、(1)/1-1/1.1, (2)/1-2/1.2…などを適宜用いる (書式は統一すること)。
- (4) 章, 節には数字だけではなく必ず表題をつける。
- (5) 章のローマ数字は、全角特殊文字 (I, III, IV など) を用いず, 必ず半角 century (I, III, IV など) で入力すること。II, IV, IX などは, I, V, X などの組み合わせで入力する (例: IV は “ I ” と “ V ” を組み合わせる)。
- (6) 章と節の数字の後ろに点はつけず, 半角 2 文字分のスペースを入れて表題を記す。
- (7) 章見出しの前と後ろの行にはそれぞれ 1 行分の空行を, 節以下の見出しの前の行には 1 行分の空行を入れること。

### 3. 日本語文章の表現

- 3-1 本論では、現代かなづかい (ただし引用文は原文どおり) を用いる。
- 3-2 字は新字体を用い、難しい漢字はなるべく避ける。
- 3-3 接続詞, 副詞, 助動詞, 代名詞はなるべくかな書きにする。  
例: 所謂→いわゆる 丁度→ちょうど 又→また, 但し→ただし
- 3-4 繰り返しの記号のうち, かな文字の反復記号 (ゝ等) は避け, 漢字の反復記号 (々) は用いる。  
例: あゝ→ああ 人人→人々
- 3-5 句点はマル (。), 読点はカンマ (,) を用いる。いずれも全角にすること。
- 3-6 漢字名以外の外国の人名・地名等はカタカナで表記する。必要に応じ, 初出時にマル

括弧内に原綴りを記す。

例: ギアツ (Clifford Geertz), サンダカン (Sandakan)

- 3-7 和文にかかる括弧 (マル括弧, 大括弧, キッコウ括弧等) は, 原則としてすべて全角とする。
- 3-8 パソコンの機種依存文字は文字化けの原因になるので, できるだけ使用しない。たとえば, ①は(1), ⅢはIII とする。
- 3-9 名詞を並列する場合は, 全角カンマ ( , ), ナカグロ ( ・ ) を適宜, 用いる。
- 3-10 引用文は前後にカギ括弧「 」をつける。ただし, 引用が比較的長いときには, 改行してブロックとする。引用ブロックは左側全体を 2 文字インデントし, さらにその 1 行目を 1 字下げる。前後のカギ括弧「 」はつけない。引用ブロックと前後の本文との間には 1 行分の空行を入れる。引用の直後に文献を指示する。引用文中の引用者補記は, キッコウ括弧 [ ] に入れる。

#### 4. 数字・年号

- 4-1 数字は, 数値の表現には半角アラビア数字, 概念の表現には漢数字を使用する。適宜, 桁を区切る半角カンマ ( , ) をいれる。  
例: 1990 年, 3,120 人, 一流, 第二次世界大戦
- 4-2 分数は, 3 分の 1, 20 分の 7 のように示す。パーセントは% (半角 century) とする。
- 4-3 数の幅は半角ハイフン ( - ) を用いる。  
例: 3-6 人, 1880-90 年
- 4-4 メートル, トン等の数値単位はカタカナ書きとする。
- 4-5 年号には原則として西暦を用い, 必要に応じて日本の元号, 中国暦, 朝鮮暦, ジャワ暦, イスラーム暦などを併記する。
- 4-5 図, 表は横書きを原則とする。番号および表題は, 図/表, 図/表番号 (半角数字), 半角スペース 2 文字, 表題の順で記す。  
例: 図 1 魚醤の分布

#### 5. 参考文献

論文を書くために参照した文献ならびに引用した文献については, 以下のように表記する。注をたてて表記することはしない。

- 5-1 文中の引用表記 (以下の “=” は, 実際には表記しない)
- (1) 全角大括弧 (始) = 著者名 (ファミリーネームのみ) = 半角スペース = 刊行年 = 半角コロン = 半角スペース = 参照/引用したページ数の範囲 = 全角大括弧 (終) とする (日本語文献, 英語等の文献いずれも同じ)。句読点は全角大括弧 (終) の後に置く。  
例:  
…である [末成 1999: 387-389]。…といわれている [Watson 1985: 593-594]。
- (2) 論文集を参照/引用した場合は, (1)の様式で著者名にかえて編者名を次のように記載する。日本語の文献であれば, 編者名の後に「編」を付す。英語等の文献で編者が一人であれば, 著者名の後に “ed.” (または ed.に相当する当該言語の単語/略語), 編者が二人以上であれば “eds.” (または eds.に相当する当該言語の単語/略語) を付す。

例:

[加藤編 2004] / [植野・蓼沼編 2000]  
[Hefner ed. 2002] / [Hefner and Horvatic eds. 1997]

- (3) 編著者が複数の文献を参照／引用した場合は、編著者名を次のように記載する。日本語文献については、ファミリーネームをナカグロでつなぐ。英語等の文献については、編著者が2人であれば、編著者のファミリーネームを“and”（または and に相当する当該言語の単語）でつなぐ。編著者が3人以上であれば、編著者のファミリーネームをカンマでつなぎ、最後の編著者のファミリーネームのみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。
- (4) 同じ文献の異なる箇所を表記する場合は、半角カンマ（,）で参照箇所を分ける。

例:

[末成 1999: 387-389, 404]

- (5) 異なる文献を同時に表記する場合は半角セミコロン（;）を用いる。

例:

[末成 1999: 387-389; 2005: 107; 山本 2005: 12]

- (6) ウェブサイト（オンライン）の資料・論文等を参照／引用した場合は、まず上記の文献の場合の記載方法に従って著者名、編著者名、またはサイトの管理運営組織名を記し、その後、日本語サイトの場合は「(オンライン)」を、英語等外国語のサイトの場合は“(online)”を付し、半角スペースの後、記事執筆年（もしくはデータの公開年）を記す。

例:

[外務省（オンライン） 2014] / [Department of Statistics, Malaysia (online) 2014]

- (7) *ibid.*, *op. cit.*, 前掲書などの表記は用いない。

## 5-2 参考文献一覧

- (1) 参考文献一覧は、本文または謝辞の後に「参考文献」として記す。記載するのは、本文や注で引用したものに限る。著者名のローマ字アルファベット順または50音（あいうえお）順で記載する。同一著者に複数の文献がある場合には、出版年順で文献を記す。同一著者に出版年が同じ文献が複数ある場合には1987a, 1987bなどとして区別する。
- (2) 複数の編著者の日本語文献を記す場合は、植野弘子・蓼沼康子（編）のように、編著者名をナカグロでつなぐ。ただし、カタカタ書きの外国人名を含む場合には、吉原和男／ペトロ・クネヒト（編）のように、ナカグロに代えて全角のスラッシュを用いる。
- (3) 複数の編著者の欧米語文献を記す場合、第1編著者については、氏名を倒置させてラスト・ネーム、ファースト・ネームの順とするが、第2編著者以降については、氏名を倒置させない（ただし本文中の引用では、編著者のすべてについてファミリーネームのみを記す）。編著者が2人の場合、編著者名は“and”（または and に相当する当該言語の単語）でつなぐ。編著者が3人以上の場合は、編著者名はカンマでつなぎ、最後の編著者名のみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。
- (4) 日本語・欧米語以外の文献の記載法は、欧米語文献の例に準ずるが、著者名のファースト・ネーム、ラスト・ネームなどの配列は各言語の慣例に従う。
- (5) 雑誌名は原則として略語ではなく全て表記する。煩雑さを避けるために略語を使う場合は、略語一覧を参考文献表の冒頭に記す。

- (6) 副題は、原典の形式に関わらず、日本語文献の場合は全角ダッシュ二つ（——），ローマ字アルファベット使用言語の文献の場合は半角コロン（:）で示す。

5-3 参考文献表の表記

(1) 雑誌論文の場合

〔日本語〕 著者名（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝「論文タイトル」＝『雑誌名』＝巻＝半角マル括弧（始）＝号＝半角マル括弧（終）＝半角コロン＝半角スペース＝掲載ページ範囲＝全角ピリオド

〔英語等〕 著者名（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝論文タイトル＝半角カンマ＝半角スペース＝イタリック雑誌名＝半角スペース＝巻＝半角マル括弧（始）＝号＝半角マル括弧（終）＝半角コロン＝半角スペース＝掲載ページ範囲＝半角ピリオド

例:

松村圭一郎

2007 「所有と分配の力学——エチオピア西南部・農村社会の事例から」『文化人類学』72(2): 141-164.

Bird-David, Nurit

1990 The Giving Environment: Another Perspective on the Economic System of Gatherer-Hunters, *Current Anthropology* 31(2): 189-196.

(2) 論文集に掲載されている論文の場合

〔日本語〕 著者名（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝「論文タイトル」＝『論文集名』＝編者名＝全角マル括弧（始）＝編＝全角マル括弧（終）＝全角カンマ＝所収ページ範囲＝ページ＝全角カンマ＝発行地名＝半角コロン＝半角スペース＝出版社＝全角ピリオド

〔英語等〕 著者名（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝論文タイトル＝半角カンマ＝In＝イタリック論文集名＝半角カンマ＝edited by＝編者名＝半角カンマ＝pp.＝半角スペース＝所収ページ範囲＝半角カンマ＝発行地名＝半角コロン＝半角スペース＝出版社＝半角ピリオド

例:

末成道男

1999 「ベトナムから見た漢族家族の特徴」『中原と周辺——人類学的フィールドワークからの視点』末成道男（編），387-408 ページ，東京：風響社。

Watson, James L.

1986 Anthropological Overview: The Development of Chinese Descent Group, In *Kinship Organization in Late Imperial and Modern China, 1000-1940*, edited by Ebrey, Patricia Buckley and James L. Watson, pp. 274-292, Berkeley: University of California Press.

(3) 単行本の場合

〔日本語〕 著者名（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝『書名』＝発行地名＝半角コロン＝半角スペース＝出版社＝全角ピリオド

[英語等] 著者名(改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = イタリック書名 = 半角カンマ = 発行地名 = 半角コロンの半角スペース = 出版社 = 半角ピリオド

例:

未成道男

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化——ムコ入り婚からヨメ入り婚へ』東京: 東京大学出版会.

Freedman, Maurice

1958 *Lineage Organization in Southeastern China*, London: The Athlone Press.

(4) 論文集の場合

[日本語] 編者名 = 全角マル括弧(始) = 編 = 全角マル括弧(終) (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 『書名』 = 発行地名 = 半角コロンの半角スペース = 出版社 = 全角ピリオド

[英語等] 編者名 = 半角マル括弧(始) = ed (編者が一人) / eds (編者が二人以上) = 半角ピリオド = 半角マル括弧(終) (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = イタリック書名 = 半角カンマ = 発行地名 = 半角コロンの半角スペース = 出版社 = 半角ピリオド

例:

加藤剛(編)

2004 『変容する東南アジア社会——民族・宗教・文化の動態』東京: めこん.

植野弘子・蓼沼康子(編)

2000 『日本の家族における親と娘——日本海沿岸地域における調査研究』東京: 風響社.

吉原和男/ペトロ・クネヒト(編)

2001 『アジア移民のエスニシティと宗教』東京: 風響社.

Hefner, Robert W. (ed.)

2002 *The Politics of Multiculturalism: Pluralism and Citizenship in Malaysia, Singapore, and Indonesia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

Hefner, Robert W. and Patricia Horvatic (eds.)

1997 *Islam in an Era of Nation-States: Politics and Religious Renewal in Muslim Southeast Asia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

(5) 再版された図書, 発行後に書籍に収録された論文を参照した場合

参照した図書の発行年を最初に記し, 半角マル括弧( )内に初版年を記す。必要に応じて初版の書誌情報を入れる。

例:

馬淵東一

1974(1938) 「台湾高砂族の父系制における母族の地位」『馬淵東一著作集 第三巻』9-65 ページ, 社会思想社(初版: 『民族学年報』1)。

(6) ウェブサイト上(オンライン)の資料・論文等を参照した場合



[日本語]

著者名（またはサイトの管理運営組織名）（改行）＝記事執筆年（もしくはデータの公開年）＝「ページ名」＝年月日アクセス＝全角ピリオド（改行）＝URL

[英語等]

著者名（またはサイトの管理運営組織名）（改行）＝記事執筆年（もしくはデータの公開年）＝“ページ名”＝半角ピリオド＝Accessed on Month Date, Year＝半角ピリオド（改行）＝URL

\*URL にハイパーリンクが付されている場合は削除する。URL が 2 行以上にわたる場合は、適宜スペースを入れて改行する。

例:

外務省

2014 「日・インドネシア外相会談（概要）」2014年3月10日アクセス。

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/s\\_sa/sea2/id/page3\\_000680.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/s_sa/sea2/id/page3_000680.html)

Department of Statistics, Malaysia

2014 “External Trade Indices, Malaysia.” Accessed on March 10, 2014.

[http://www.statistics.gov.my/portal/index.php?option=com\\_content&view=article&id=1125&Itemid=111&lang=en](http://www.statistics.gov.my/portal/index.php?option=com_content&view=article&id=1125&Itemid=111&lang=en)

#### (7) その他

- ・ローマ字アルファベット使用言語の雑誌名・書名は、イタリック体とする。
- ・文献の表示の最後には、日本語・中国語の場合は全角ピリオド（．），ローマ字アルファベット使用言語の場合は半角ピリオド（.）を付す。
- ・日本語、中国語、ローマ字アルファベット使用言語以外の言語の文献の記載は、当該言語の慣習的な表記法に従う。

## 6. 注

- 6-1 注は脚注とする。文中で言及する場合は、必ず「注」と記す。「註」は使用しない。
- 6-2 注番号は 1 からおこし、1)のように半角数字、右側のみの半角マル括弧（終）で示す。フォントは **century**。注の数字とマル括弧は、本文中では注を付す箇所の右肩に上付きでつける（例：～である<sup>1)</sup>）。ただし脚注ブロック内の注番号は、通常のフォントサイズで記し、上付きとしない。
- 6-3 投稿原稿における脚注ブロックの書式は任意とする。ただし、採用後提出する最終原稿においては、原則として脚注ブロック内のフォントサイズ、段落とも本文と同様にする。
- 6-4 注は原稿枚数に含まれる。枚数の 10%以内を注の分量の目安とする（たとえば 50 枚の場合は 5 枚以内）。

## 7. 図・表・写真

- 7-1 図、表、写真は、原則として執筆者が作成したものをそのまま掲載する。本文中に挿入箇所を分かりやすく示すこと（例：「→図 1 を挿入」）。
- 7-2 図、表、写真には、通し番号をつける（例：図 1、図 2…、表 1、表 2…）。また、番号だけでなく必ず表題またはキャプションをつける。
- 7-3 図および写真の表題（またはキャプション）は下、表の表題は上に記す。
- 7-4 図、表ともに作成の際に使用した資料・文献を「出典：\*\*」というように明示す

る。写真の場合は、撮影者を「\*\*撮影」(または「出典:\*\*)」というように明示する。

## 8. 歴史的呼称

歴史的呼称は当時の呼称に従い、新字体・現代かなづかいで表記する。

## 9. その他の注意

ワープロソフトを使用する際には、以下の点に注意して原稿を作成すること。

9-1 入力画面では区別がつかなくても、印字するとその差が目立つ文字、記号。

例: ー(長音)とー(ハイフン)

X(ローマ字のエックス)とx(バツ), 1(数字)とl(Lの小文字)

9-2 日本語の文字および外国文字については、原則としてウィンドウズで使用可能な文字で入力する。英語表記で用いられるローマ字アルファベット以外の外国文字、別途インストールが必要なフォント、その他の特殊な文字・記号・フォントを使用する場合は、事前に編集委員に相談すること。

# 『白山人類学』査読規定

## 1. 目的

白山人類学研究会は、『白山人類学』の学術雑誌としての水準を確保するため、査読の制度をおき、その運営については編集委員が責任をもつ。

## 2. 対象

査読制度の対象となるのは、『白山人類学』に投稿された原稿(編集委員からの依頼原稿を含む)のうち、論文および研究ノートとしての掲載を目的とするものである。

## 3. 査読者

編集委員は、投稿された原稿1編について、2名の査読者を選定し査読を依頼する。査読者の氏名は投稿者に通知しない。また、投稿者の氏名も査読者に通知しない。

## 4. 査読の過程

査読者は、主に下記の第7項に挙げられた項目について、査読対象の原稿を評価し、掲載に関する判定をおこなう。査読者は、原稿に修正を求める場合、修正すべき点について具体的なコメントを記さなければならない。査読者は、定められた期限内に、編集委員に対して原稿の掲載に関する判定結果とその根拠を表明しなければならない。

## 5. 原稿の採択

編集委員は、査読者の査読結果を十分に考慮・検討して、原稿掲載の可否を決定する。査読者2名の意見が大きく異なる場合は、編集委員が査読者の意見をふまえつつ、独自に掲載の可否を判断することもある。編集委員は、査読結果をすみやかに投稿者に通知しなければならない。

## 6. 原稿の修正

再審査が必要とされた原稿の投稿者は、定められた期日までに修正原稿を編集委員に送付しなければならない。この際、投稿者は、査読コメントに対する自らの改稿内容について、文書で説明を行わなければならない。編集委員は、判定が「修正条件付き掲載可」の場合には、原稿の修正が適切になされていることを確認したうえで、原稿の採択を決定する。判定が「修正後要再査読」の場合は、改めて査読者に査読を依頼する。

## 7. 査読の項目

査読者は以下の項目などを念頭において評価、判定、掲載区分の判断をおこなう。

### A. 内容の評価

- (1) 広義の人類学に関わる学術的研究に貢献しているか
- (2) 記述されている内容は正確か
- (3) 議論の展開は適切かつ論理的か
- (4) 資料および文献の取り扱いが適切か

### B. 表現・形式の評価

- (1) 表題・キーワードは扱われている内容に即して適切か
- (2) 文章の表現は明瞭で読みやすいか
- (3) 全体の構成や章・節の見出しの立て方は適切か
- (4) 図・表は有意に挿入され、かつ有効に使用されているか
- (5) 参考文献の記載方法は適切か

### C. 採択の判定

- (1) 掲載可（修正を必要とせず、投稿時のまま掲載が可能）
- (2) 修正条件付き掲載可（主に技術面に関わる微細な修正のみを必要とする。再査読はおこなわない）
- (3) 修正後要再査読（再査読をおこなう）
  - a) 一部の用語、表現、パラグラフ等について、書き直しを必要とする
  - b) 一部の章または節について、書き直しを必要とする
  - c) 大幅な書き直しを必要とする
- (4) 掲載不可（内容が本誌の目的に即していない、あるいは学術誌掲載の水準に達していないことが明白な場合の判定。査読者は、評価およびコメントにより、判定の根拠を示さなければならない）

## 8. 本規定の改廃

本規定の改廃は、白山人類学研究会運営委員の承認によっておこなう。

## 9. 附則

本規定は、2014年4月1日から施行する。

編集後記

本号では、2015年11月7日に開催された、白山人類学研究会第8回研究フォーラム「ヨーロッパにおける移民第二世代の学校適応——教育人類学的アプローチ」(代表者: 山本須美子)での報告に基づく論文と研究ノートにより特集号を組んだ。

2015年、激化する紛争や慢性的な貧困に苦しむ中東やアフリカからEU諸国へ流れこむ難民の数は数十万人に膨らみ、この年は欧州難民・移民危機とまで言われた。こうしたことを考えると、上記の特集は実にタイムリーであった。本特集が、EU諸国にやってきた難民・移民の文化や教育にかかわる問題、外来のかれの文化とEU諸国の文化の混合が教育にもたらす問題などをさらに深く考えるきっかけになれば幸いである。

特集以外にも、多様なテーマをあつかう論文を掲載できた。1992年創刊の『白山人類学』の歴史上、論文9本と研究ノート1本を掲載した本号は、16本の論文を掲載した第2号(1993年)に次ぐボリュームになった。寄稿者の皆さんに感謝したい。

そのボリュームゆえに本号の編集作業にはかなりの時間を要したが、それはうれしい悲鳴だったと言うべきだろう。今後も、『白山人類学』の編集委員は、多種多様なトピックをあつかう研究・調査成果を歓迎し、それらを丁寧に編集し、つねに質の高い学術誌を刊行し続けることができるよう尽力していく。次号でもふたたび、幅広い国・地域を対象とする多種多様な研究・調査成果を論文、研究ノート、資料、書評、フィールド通信などの形で寄せていただけるよう、会員の皆さんにお願い申し上げるしだいである。

編集後記を書いているわたしにとっては、本号の森田論文が興味深かった。2015年8月、地域住民の経済活動を調査する目的で、自分

自身がインドネシア・東ヌサトゥンガラ州(西ティモール)と東ティモール・オイクシ県の国境地帯を訪問していたからである。バイクに乗って北中ティモール県(西ティモール)のケファを出て、オイクシ県(東ティモール)との国境地帯へ向かう道筋では、「ケファにほど近い(森田論文があつかった)ナパンの国境よりも、オイクシ県都のパンテマカッサルに近く、港町であるウィニの国境でのほうが、(推測するかぎり「公の」)各種経済活動が活発だ」と複数の人びとが口にしたことを、いまさらながら思い出している。ウィニにも「ねずみの道」のような存在を感じたものの、ナパンに行かなかつたことは少し悔やまれる。

(間瀬 朋子)

白山人類学編集委員 Board of Editors

- |       |                   |
|-------|-------------------|
| 植野弘子* | UENO Hiroko*      |
| 長津一史  | NAGATSU Kazufumi  |
| 間瀬朋子  | MASE Tomoko       |
| 松本誠一  | MATSUMOTO Seiichi |
| 箕曲在弘  | MINOO Arihiro     |
| 山本須美子 | YAMAMOTO Sumiko   |

\* Chief Editor



---

# 白山人類学

第 19 号

発行日

定価：本体 2000 円＋税

2016 年 3 月 31 日

編集：発行

白山人類学研究会

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学社会学部 松本誠一 気付

印刷

新村印刷株式会社

〒135-0045 東京都千代田区九段北 3-3-5

TEL 03-3264-6511

FAX 03-3264-7106

発売

岩田書院 (Iwata Shoin)

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 4-25-6-103

TEL 03-3326-3757

FAX 03-3326-6788